

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2016年 春号

第7巻第1号（通算18号）

2016年3月27日発行

地方からの発信

—ケベック研究の新たな展開に向けて—

真田 桂子（阪南大学）

2月13日、阪南大学あべのハルカスキャンパスにて、ケベック学会西日本地区第1回研究会が開催された。地方での研究大会の開催としては、すでに2013年に関西学院大学でケベック学会全国大会が開催されており初めてのことでない。しかし今回は、今後の地方での定期的な研究会開催を見据えた第一歩として、日本でのケベック研究が新たな局面を迎えたことを示したものとと言えるだろう。

今回の研究会では、先の関学でのワークショップの流れを引き継ぎ、ベルギー研究会との合同開催となった。各々の発表についての詳しい報告は別途の記事を参照願いたい。が、「多言語社会ケベックとベルギー—その言語状況と舞台芸術」と題された今回の研究会の目的と概要は次のようなものである。すなわち両地域はともにフランス語圏の周縁地域として、フランス語を公用

語とする地域を抱え、かつ他の言語（ケベックは英語、ベルギーはオランダ語とドイツ語）との共存をせまられる多言語社会である。今回は両地域の言語社会状況を比較検証し、さらに複雑な多言語状況を背景に生み出され、世界的に注目を浴びている両地域の舞台芸術に注目し、その旺盛な創作活動を支える社会的インフラの教育や文化

（次ページへ続く）



挨拶する真田桂子会員

●本号の内容●

巻頭言（真田桂子）…1 ケベック学会西日本地区第1回研究会を振り返って（神崎舞）…2
2015年度韓国ケベック学会に参加して（丹羽卓）…4 リレー連載「ケベックと私」第1回…6

政策までも分析しようとする試みであった。第一部の言語状況については、ベルギー研究会の石部尚登氏とケベック学会の大石太郎会員が報告を行い、それぞれのテーマのもとで詳細なデータに基づいた緻密な分析を繰り広げ、関学でのワークショップで明らかになった両地域の多言語社会としての相違をさらに掘り下げる発表を行った。また第二部の舞台芸術については、ベルギーの現代舞台芸術に詳しい高橋信良氏とケベック、ベルギー双方の舞台芸術と文化政策に詳しい藤井慎太郎氏が登壇し、両地域の複雑な言語事情が各々の社会の教育システムや文化政策を如実に反映し、それらがダイナミックで独自性に富んだ舞台芸術を开花させている現状を明らかにした。発表者のうち石部、高橋、藤井氏ははるばる東京から参加して研究会を大いに盛り上げて下さった。

多言語や多元性の問題を内包するケベックは、グローバル化における社会の変容を考える上で極めて示唆に富む地域であろう。先の関学の学会や今回の研究会で、ベルギー研究会との合同研究会を開催したのは、単に出席者を増やし研究会の規模を確保するためだけではなく、ベルギーとの比較研究という枠組みにおいて、ケベックの問題がさらに先鋭に問い直されると考えたからである。その他、例えばナショナリズムが問題となる世界の諸地域との比較など、今後ケベックを広い文脈で捉える試みはますます重要になってくると思われる。また地

域研究の特徴としてしばしば横断領域的な研究が求められ、今回の研究会でも、言語、社会、芸術といった複数の分野にまたがる視点から、刺激的で活発な議論が繰り広げられた。さらにこのような外国の地域研究を、日本人として実際にどう生かすべきかとの真摯な問いかけも出され意見交換がなされた。

研究会にはケベック、ベルギー研究だけでなく、カナダやフランス語圏研究など幅広い分野からの二十数名が参集し、会場は心地の良い熱気に包まれ大変盛況であった。ちょうどあべのハルカスからの清々しい眺めのように、今後のケベック研究のさらなる発展と新しい展望を指し示す充実した研究会となった。

(西日本地区第1回研究会実行委員長)

ケベック学会西日本地区第1回研究会を振り返って

神崎 舞 (摂南大学)

2016年2月13日に、阪南大学あべのハルカスキャンパスにて、ケベック学会西日本地区第1回研究会が、ベルギー研究会と合同で開催された。「多言語社会ケベックとベルギー—その言語状況と舞台芸術」というテーマで、記念すべき第1回目の研究会に相応しい4名の研究者による発表が行われた。

第一部は、大石太郎会員(関西学院大学)による、ケベックのアングロフォンに關す

る発表で始まった。フランス語圏であるケベックでは、カナダにおける多数派アングロフォンは一転少数派となる。その少数派アングロフォンに焦点を当て、人口分布図等を用いながら彼らが置かれている現状について報告した。次に、石部尚登氏(日本大学)は、ワロン運動の観点からベルギーにおけるフランス語に関して報告した。言語における基本的な説明もパワーポイントで視覚的にまとめられ、ベルギーの言語に馴染みのない聴衆にとっても、理解しやすい発表内容であった。

続く第二部では、ベルギーの現代舞台芸術について、高橋信良氏(千葉大学)が発表を行った。ベルギーで優れた舞台芸術が生まれる背景には、政府による支援に加え、舞台制作者を育成する充実した教育及び情報機関があることを指摘した。次に藤井慎太郎氏(早稲田大学)が、国際的にも名高いケベックの舞台芸術の発展に、文化政策に

よる恵まれた環境が大きく貢献してきたことを、豊富な資料を交えて発表した。

ヨーロッパのベルギーと北米に位置するケベックは、地理的に隔たりがあるものの、ベルギーもケベックも言語に端を発した複雑な問題を抱えているという点で共通する。それゆえに、解決し難い葛藤が生まれるが、その葛藤があるからこそ、言語や舞台芸術は文化的アイデンティティの拠り所として、それぞれの地域に重要な役割を担っていることを改めて認識した。

研究会は、終始和やかな雰囲気の中、多くの質疑応答がなされ、活発な議論が展開された。東西の研究者による興味深い発表内容ゆえに、もっと時間があればという声が多く聞かれた。しかし一方で、時間が厳密に管理されていたことにより、適度な緊張感が維持されたこともまた、今回の研究会が充実していたという印象を強めた要因だったといえるのではないだろうか。



西日本地区第1回研究会参加者の集合写真

研究会終了後は、あべのハルカス内のレストランで懇親会が行われ、有意義な時間を過ごすことができた。さらに食後は、あべのハルカスの展望台に登った。生憎の天気ではあったが、地上 300 メートルから眺める大阪の景色を堪能した。

今後も、東京一極集中型になるのではなく、東京以外の地域での学会及び研究会が活発に開かれることを期待したい。

2015 年度韓国ケベック学会年次大会に参加して

丹羽 卓 (金城学院大学)

2015 年 10 月 24 日 (土)、ソウルの韓国外国語大学校にて、韓国ケベック学会 (ACEQ) の年次大会が開催され、今回は私が AJEQ から参加させていただきました。メインテーマは「州民投票 20 周年」でした。LEE In Sook 会長の開会の挨拶の後、ゲストスピーカーとして招かれた Serge CANTIN ケベック大学トロワ・リヴィエール校教授の「*La Souveraineté dans l'impasse*」というタイトルの発表からセッションが始まりました。基本的な情報の説明に時間をとり過ぎたため、本題に入られたところで時間切れになってしまい残念でしたが、ケベックでは 1995 年のレファレンダムの時、家族内での対立さえ起こり、今でもレファレンダム疲れが残っているという指摘は興味深く、それゆえに発表タイトルのような「主権構想の行き詰まり」という現状になっている

のだろうと推測しました。11 月 16 日に上智大学で同じタイトルで講演しておられるので、そちらでは最後までお話しになったものと思います。

それに続いて、私が「*Evolution chronologique de l'attitude du Québec envers ses minorités ethnoculturelles*」というタイトルの発表を行いました。ケベック政府の移民統合政策を 1970 年代まで遡って年代順に検証するという内容です。そうした政策の必要性が自覚されたのが第 1 回目の州民投票の後で、以後そこで示された政策は時の政権によって修正されつつも、大筋では一貫していたことを明らかにしました。コメンテーターを務めてくださった JIN Jong Hwa さんは文学研究者で、こうした問題の専門家ではないにもかかわらず、事前に提出した発表原稿をきちんと読んで、的確なコメントをくださいました。出席者には興味を持って聞いていただけたようで、「AJEQ の発表者」という大役をなんとか果たせて安堵しています。

当日のそれ以降の発表は次の通りでした。

CHO Chansoo (Univ. Kangnam) « *La sociologie politique et l'économie politique du séparatisme québécois* »

LEE Jooyoung (Univ. Sungkyunkwan) « *Wajdi Mouawad, la réécriture d'un mythe personnel - autour du thème de l'étranger dans *Le soleil ni la mort ne peuvent pas se regarder en face** »

SHIN Junga (Univ. Hankuk des études étrangères) « Un regard anthropologique sur la vie urbaine dans *Les aurores montréalaises* de Monique Proulx »

これらの発表はすべて韓国語だったため失礼して、CANTIN ご夫妻と一緒に会場を出て、ベンチに座って1時間くらい討論できたのは収穫でした。CANTIN 教授はとても気さくな優しい方で、知的な奥様ともども、ケベックの現状について熱心にご自分たちの意見を聞かせてくださり、お二人ともケベックにおけるフランス語とフランス語系ケベック文化の存続に危機感を抱いておられることがよくわかりました。お二人によれば、要するに BOUCHARD 教授は理想主義すぎるということのようです。私が交流のある BOUCHARD 教授や A.-G. GAGNON 教授のような人々とは見解を異にする、フランス語系ケベック人の歴史・文化・伝統を強調する方々と率直な意見交

換ができ、その考えを直接聞いたのは意義深いことでした。

加えて特筆しておきたいのは、ACEQ の方々の猛烈な歓待です (ACEQ 関係者の肩書は年次大会時点のもの)。到着した日の夕食は CANTIN ご夫妻と一緒に、会長の LEE In Sook さんと次期会長の HAN Yongtaek さんのご招待を受けました。大会当日の昼も LEE In Sook 会長はじめ ACEQ のメンバー10人くらいと会食。食事が終わって会場に行くと、今度は初代会長の HAN Daekyun さんと2代目会長の LEE Jisoon さんが待ち受けていてくださり、ひとしきり小畑先生のことから始まって、これまでの両学会の親密な交流についてお話しくささいました。さらに大会終了後は、初代からの会長が全員揃って参加の懇親会と2次会。フランス語と韓国語が飛び交うなかで、「暖かい」というより「熱い」歓迎を受けたことが忘れられません。



ACEQ 大会参加者の集合写真 (筆者の隣の女性が LEE In Sook 会長)



HAN Daekyun 初代会長とともに

こうして今回貴重な機会をいただき、短い滞在ではありましたが、ACEQ メンバーとの濃密な交流を通して、AJEQ と ACEQ の関係がいかに価値あるものかを肌で感じることができました。小畑先生始めこの関係の発展のためにご尽力くださった方々に本当に感謝し、今後もなお実り多い関係が続いていくのをお願いします。



HAN Yongtaek 次期会長および LEE Jisoon 2代目会長（手前）とともに



＜リレー連載「ケベックと私」第1回＞ ケベックの四季を過ごして

友武 栄理子（関西学院大学）

日本で知り合ったカナダ人夫妻は、サスカチュワン州のサスカトゥーン空港から車で3時間のミオタ在住で、夫のマーチンは大麦やカノーラの農業、奥さんのフランセスは小学校の先生でした。長らくの文通の後に、ミオタと娘のパトリシアの住むヴァンクーヴァーを訪ねるようになり、初めてケベックに足を延ばしたのは1995年の2月のことでした。ケベック市の空港から車で回った旧市街やラヴァル大学のキャンパスは真っ白で、吹雪の中に人影はなく、案内してくれたパトリシアの友人のルーシーは、吹雪から頭を守るニット帽を買うように言い、「次は夏にいらっしゃいよ」とにこやかに言いました。

この頃、私は京都の私立高校でフランス語を教えながらの社会人大学院生で、恩師のアドバイスによりフランス研究からカナダ研究に方向を変えたばかりでした。そして、サスカチュワン州、マニトバ州に縁のあるフランス系のルイ・リエルを知り、彼が首謀者であった19世紀のノースウェストの反乱について1996年と1997年の夏にモントリオール郊外でホームステイしながら大学の図書館で資料収集を行い、修士論文が完成しました。

2000年、フランス政府によるフランス語教師を対象にした夏期研修でフランス北部ノルマンディー地方のカーン大学に派遣さ

れ1ヶ月を過ごしました。そして、校外学習で訪れたブルターニュ地方のサン・マロ港の高台のカナダの方向を指差すジャック・カルチエ像に、この地から17~18世紀に移民の船がケベックを目指した歴史に思いを馳せました。4年後、これと全く同じカルチエ像をケベック市のガブリエル・ロワ図書館前で見ることになります。フランス料理への興味からフランス語を学んだ私にとって、酪農がさかんなノルマンディーのチーズ、バター、クリームを多用した料理、ブルターニュのそば粉のガレット、りんごのお酒シードルなど、この土地ならではの特徴のある食事は魅力的でした。さらに、2002年夏のモントリオール大学におけるケベック州政府によるアジア地域のフランス語教師のための研修に派遣された1ヶ月の間には、フランス北西部からの開拓移民が北米大陸に持ち込んだ食習慣、燻製などの先住民の知恵、そしてセントローレンス川岸の豊かな恵みの三つの要素が作り上げたというケベックの郷土料理の数々に魅せられました。



ラヴァル大学人文学部棟

そして、2003年夏からの1年間、博士論文の執筆を目指し、ラヴァル大学ケベック研究センター(CIEQ)で、ブリジット・コーリエ教授、ポール・オーヴァン教授のご指導のもと、19世紀にケベックで発行された教科書の中の日本の記述について調査をすることになり、旧市街の城壁近くのアパートでの生活が始まりました。8月初め、観光客で賑わう旧市街のヌーヴェルフランス祭り、私も17世紀の衣装でパレードに参加しました。9月には樹木の先端からゆっくりと紅葉が始まり、寒風が吹き、11月には雪が舞い始めました。学生寮に空きが出て入れたのが2月で、この頃は初めてケベックを訪れた時と同じく吹雪の日々で、気温 -35°C 、体感温度は -50°C にもなりました。長い冬のためにうつ病を発症しやすいと言われるケベックで、私もホームシックが募りましたが、招かれたクリスマスの食卓に並んだ鴨のローストのラズベリーソース、トルティエール(ミートパイ)、クレトン(豚ひき肉のパテ)などの伝統料理やウィンターカーニヴァルで味わった「カリブー」(ホットワイン)や「ビーバーのしっぽ」(揚げ菓子)、煮詰めたメープルシロップを雪の上で固めた「タフィー」に癒されました。また、リスの足跡の残る雪面に目を凝らし、溶けた雪が寒風のために枝先で凍り互いに打ち合っただる音色に木の下で耳を澄ます。こうしてケベックの厳しくも美しい冬を過ごしました。早春の3月には、雪のオルレアン島で出来たてのメープルシロップ



ヌーヴェルフランス祭りにて

を味わう「砂糖小屋」の賑わいがあり、Joie de vivre! をモットーとして人生を楽しんでいるケベックの人々に魅了されました。

4月、除雪車が積み上げた雪山が排気ガスで黒く汚れ、泥となって溶けていく中、上達しないままのフランス語の会話、さらに残り時間の少なさに胸が押しつぶされそうになり始めました。5月、ラヴァル大学のキャンパスでは、雪解けの地面にまずタンポポが咲き、やがて一面黄色となり、そこから木々が芽吹き始め、そして新緑の季節はあっという間に過ぎ去りました。締めくくりの研究成果報告は新学期に先生が揃われてからとなり、気持ちに余裕が出来て、鉄道でガスペ半島へ向かいました。車の友人達とはモンクトンで合流し、プリンスエドワード島へ渡り、ノヴァスコシア州からニューファンドランド島に、さらにニューブランズウィック州を周遊して、これで記念すべき「カナダ10州踏破」となりました。

まとめの作業中にパソコンの調子が悪くなるという最大の危機がありましたがなんとか乗り切り、1年間の研究成果を、感謝を込めて報告しました。励まし助けてくれた友人達とその家族に会うためにその後もケベックを訪ね、ケベック料理を習い日本の家庭料理を披露して共に過ごす時間は、私の人生の楽しみとなっています。これからもケベックと日本の交流にささやかながらでも貢献していきたいと思っています。

●編集後記●

今号より新たにリレー連載「ケベックと私」を始めました。これは、会員各位に自らとケベックとのかかわりをご紹介いただき、会員相互の交流を促すとともに、会員各位とケベックとのさらなる交流拡大につながることを目指しています。多くの会員に執筆者としてご登場願えれば幸いです。(T)

日本ケベック学会 (2016年3月現在)

●主要役員

- 小倉和子 (会長)
- 立花英裕 (副会長)
- 小松祐子 (副会長)
- 伊達聖伸 (副会長)
- C・ドゥロンジェ

●広報委員

- 宮尾尊弘
- 小松祐子
- 山出裕子
- 大石太郎
- S・コルベイユ

(顧問、ケベック州政府在日事務所代表)

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人：小倉和子 編集人：大石太郎